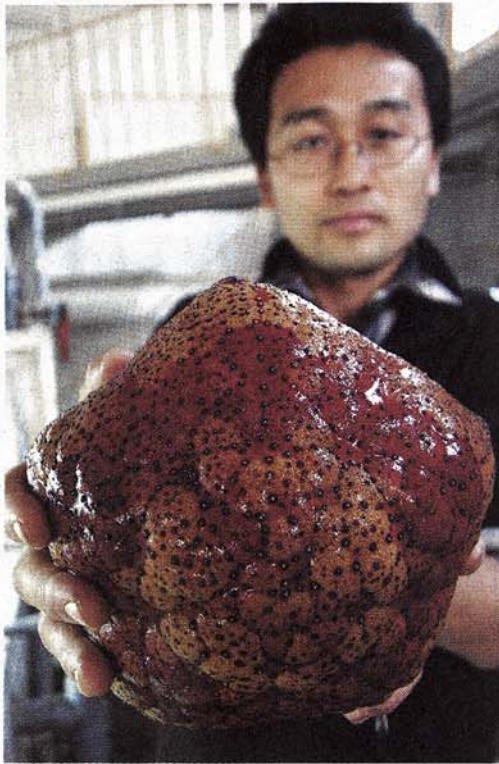


白浜沖で捕獲相次ぐ

マンジュウ海水温上昇で北上か ヒトデ

県内では珍しい南方系のヒトデ「マンジュウヒトデ」(コブヒトデ科)が、昨年11月から県北限域となる白浜町沖で相次いで捕獲されている。研究者らは、海水温上昇で生息域が北上している可能性があると注目している。

2月18日に捕れたものは直径約20センチ、高さ約12センチ、重さ約2キログラムもあり、白浜町臨海の京都大学白浜水族館で展示を始めた。捕獲したのはみなべ町堺の漁業矢倉哲男さん(63)。白浜町沖約1キログラムの水深40メートル付近に仕掛けたヒラメ網を引き上げたところ、見慣れないヒトデが掛かっていた。普段ならヒトデなどは海に返すが漁師仲間も見ることがなかったため持ち帰ったという。昨年11月下旬にはみなべ町堺の漁師湯川勝二さん(70)が、白浜町沖に仕掛けていたイセエビの刺し網で直径13センチほどの1個体を捕獲している。湯川さんも初めて見たという。



重さ約2キログラムのマンジュウヒトデ(白浜町臨海で)

いるが、成長するにつれ丸くなり高さも出てきて球形に近づく。最大で直径25センチほどになる。沖繩では普通に見られるが、県内ではこれまですぎみ町以南で時々捕獲される程度だった。

同町立エビとカニの水族館は「潜水すると大きなものを見掛けることがある。イセエビの刺し網で毎年1、2個体掛かってくるが、それほど多くない」と話す。

串本町有田の串本海中公園センターでは「それほど数は多くない。近年は大型のものが見つかる頻度が高くなっている。海水温の上昇で南方系ヒトデが定着しやすい環境ができてきているからだろう」と分析している。

京都大学白浜水族館にはマンジュウヒトデ以外にも、昨年からの先端から先端までが約40センチあるオオアカヘビヒトデや直径40センチのコブヒトデモドキなど南方系ヒトデの大型個体が次々持ち込まれている。

マンジュウヒトデは、小さいときは星形をして

(1)

昭和21年7月10日第3種郵便物認可